

龍飛へ

宮城県仙台二華中学校 三年 菊地 馨

小説「津軽」の中で太宰治は龍飛について、「本州の極地」と書いた。私はこのところ、これからの人生に対して漠然とした不安を感じることもある。人生や道には、必ず果てがある。果て、極地とはどんなところであるのか見極めたいという気持ち湧き上がり、太宰に導かれるように、この夏家族と共に車で津軽を、そして龍飛を目指したのである。

太宰の故郷、金木を後にした私たちは、太宰と彼の子守のたけの銅像がある小泊を経由して岬へ向かうことにした。

車は日本海を左手に快走した。やや曇りがちの空の下、日本海は白く鈍い色をして薄く広がっていた。無邪気な自信が揺らぎ、ともすれば正体のわからない憂鬱に捉われそうになる私の心情を描き出したような光景だった。津軽平野、と言うくらいであるから、私は道がこの平坦な調子で続いていくのだと思った。そうしてある地点で陸がすとんと途切れ、前方に海が荒々しく波立ち、道脇に「龍飛崎」という案内板がぽつんと立っている、そんな風景を想像したのである。

ところが小泊を出て間もなく、行く手に突如、小高い山が現れたのだ。道は激しくうねり、車は険しい坂をぐんぐん登っていく。右に左に急カーブ。それが終わったかと思うと激しいアップダウン。姿勢を低くしていないと体がついていけず、上下左右に振り回され、ちょうど空腹も重なって、私たちの表情は不機嫌に強張ってしまった。

運転する父が、こんなにきついワインディングは初めてだとつぶやいた。父が減多に見せない不安を声に表したことが、この場所では何物にも安心して頼ることができないという虞を掻き立てた。

気が付けば、周囲には険しい山が連なり、眼下には深い谷が広がっていた。先ほどまで道路沿いに広がっていた海は、遙か下方に時折ちらと姿を見せるばかりである。九十九折りの坂道。この道は本当に海へと続いているのだろうか……。

やがて山の中腹に小さな展望台が現れた。私たちは車酔いを醒ますためにそこへ寄り、車の外へ出た。

辺りは乳白色の霧で、何も見えない。そしてシロツメクサの仄かな香りを乗せた香気が、深い山を覆っている。

もやもやの冷たい霧が、私の頭の中へ入り込んできた。これは私の不安であろうか。将来、私はどんな人間になるのか。どうやって未来を切り開いていけばいいのか。道の終わりりで、私は何を目にしていくのだろうか。

十分ほど立ち尽くしていただろうか。ふと北の方向へ目をやると、霧が少し薄れて、乳白色の流れの中で輝く一筋の青色が躍っている。津軽海峡だった。小泊辺りまで見えていた白濁した海と、繋がっているとは思えないほど鮮やかな青である。

やがて霧は徐々に吹きはらわれ、屏風絵の如く青空と海と山とが姿を現した。海面には太陽が反射して、きらきらと神秘の光を放っていた。車酔いの気持ち悪さも不安も、いつの間にか霧と一緒に、全て洗い流されてしまった。

北へ降りる道を目で追うと、海に突き出るように白い灯台がそそり立っている。龍飛だ。

私たちは車に飛び乗り勇んで岬を目指した。

晴天の下、マリンプルーの大舞台。その先には、北海道の堂々たる山地が連なっていた。

私は荒々しい地の果てを想像していたので、北海道の山々が意外に近く見えたのは拍子抜けだった。けれどもそれは安堵でもあった。たとえここが道の果てだと思っても、見よ、海の先には次の大地があんなにも大きく広がっている。人生の道は、お前の思っているほど短いものではない。多くの山を越えて、沢山の海を見る。 endpoint など考えずに、真っすぐ、思うとおりに進め。

岬から、大きな声を受け止めた気がした。